

氏名(本籍地)	海野裕子(茨城県)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博甲第62号
学位授与年月日	平成24年3月16日
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第1項該当
論文題目	現代青年における「ひとりの時間」の持つ意味 —自我同一性形成との関連に焦点を当てて—

論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	三浦 香苗
	(副査)	昭和女子大学教授	島谷 まき子
		昭和女子大学教授	今城 周造
		東洋大学教授	堀毛 一也

論文審査結果の要旨

「ランチメイト症候群」、あるいは「ひとりじゃいられない症候群」という言葉で代表されるように、現代の青年にとっては、集団の中でいかに他者との関係を作り、保っていくか、自分ひとりの時間をどう確保し、どう過ごすかは大きな問題であり、一人の人間として個を確立していく上で重要な課題である。海野氏は、青年期での自己の確立過程を「ひとりの時間」という独自の新しい心理的概念を提案して、一連の研究をまとめ上げている。そこでは、自己の問題意識の独自性と客観性を検討するために、様々な研究手法を用いている。

まず、「居場所」、「プライベート空間」、「the capacity to be alone」、「solitude」、「loneliness」などの類似あるいは外国語概念との異同についての文献研究によって「ひとりの時間」を明確に定義し、研究の出発点としている。

また、自己の問題意識を対象化し、研究課題のポイントを得るために、探索的研究を行い、その実情把握を行っている。これらを基に作成した多肢質問紙法によって、「ひとりの時間」の過ごし方および「ひとりの時間」に関する感情・評価の信頼性・妥当性のある尺度を構成している。そして、「ひとりの時間」の過ごし方と感情・評価にどのような個人的特性が関係するかを検討するとともに、「ひとりの時間の過ごし方」が「ひとりの時間」の感情・評価に、そしてそれが自我同一性に、どのように影響を与えているかを、パス分析によって検討している。また、感情・評価の3下位尺度を基にしたクラスター分析により、群分けし、各群の特徴を記述している。さらに、発達の傾向を見るために、中・高・大学

生を対象に同一調査を実施し、青年期の発達段階の違いによって、「ひとりの時間」の過ごし方、感情・評価がいかにより異なるか、自我同一性とどう関わっているかを検討している。そして、「ひとりの時間」の過ごし方と感情・評価、自我同一性との関わりが、発達段階によって異なること、感情・評価に関するクラスターが、大学生のみを対象とした場合とは異なることを示している。

これらの異なる客観的研究手法を駆使することによって、自己の主張を明確にするとともに、新しい知見を得ている。それらは、「ひとりの時間」に関して場面や状況によって肯定・否定など様々な感情が存在すること、「ひとりの時間」の過ごし方と感情・評価は人格特性によって異なること、「ひとりの時間」の過ごし方は2種類の、感情・認知は3種類の異なる範疇に分けられること、自我同一性に関わる「ひとりの時間」の過ごし方および感情・評価の関連を明確にしたこと、「ひとりの時間」の過ごし方が大学生の場合には3クラスターに、中・高・大学生を含めて発達的に捉えた場合には5つのクラスターに類別できること、などである。これらの知見は、現代青年の特徴を理解する上で新しい視点を提供し、また彼らに寄り添った心理臨床的支援を構築していく上で貴重な情報となる。

また、本論文では扱っていないが、総括の中で今後の課題として言及している、性差研究・縦断的研究・質的研究・比較文化的研究は、いずれも本研究で明らかにした点を更に充実・発展していく上での重要な視座となるであろう。

しかしながら、さらに本論文には期待したいこともある。その1つは「ひとりの時間」の意味という主題にもかかわらず、現代青年が「ひとりの時間」をいかに過ごしているか、あるいはそれらに対する感情・評価という観点からの分析が中心であり、青年にとっての「ひとりの時間」の持つ意味に関する深い分析には必ずしも至っていない点である。もう1つは、「自我同一性形成との関連に焦点を当てて」という副題と関わるが、使用した自我同一性尺度は日本に現存する尺度の中では信頼性・妥当性のあるものとして確立したものであるが、自我同一性形成を問題とするのであれば、モラトリウムや自我拡散という青年期の自我同一性獲得の過程で問題となる現象をより直接的に扱っている尺度を採用すれば、「ひとりの時間」との関連がより明瞭に解明できたのではないか、という指摘である。

これらのより優れた論文にするための期待があるものの、本論文は研究を進めてきた視点、バランスのとれた研究手法、得られた知見、社会的意義のいずれを見ても十分優れた評価を得るものであり、博士（学術）を取得するにふさわしい研究内容であると、審査者一同、自信を持って全員一致で認めるものである。